富山大学人文学部同窓会会報 No.35
2013.10.1

題字　大島文雄先生

人文 じんぶん

人文学部の近況　人文学部長　大工原ちなみ
卒業後五十年、文芸翻訳三十年　亀井よし子（12回英文）
女子力　酒井智美（47回中文）
研究室から／哲学・人間学コース
過ぎ越し方を顧みて　蔵本栄一（３回英文）
研究室から／日本史コース
不良学生留学記～酒と涙と音楽と～　中島蕗子（53回ロシア）
二足の草鞋　紬野八史井（専攻科１回東洋史）
英訳の日本文学管見　人文学部名誉教授　平田　純

今年の総会でご講演いただきます。
詳細は８ページをご覧ください。

旧制富山高校講堂

五福キャンパス（昭和39年）

富山大学人文学部同窓会

〒930－855　富山市五福3190
電　話：（076）445－6143
ＦＡＸ：（076）445－6141
E-mail：
alumnil@hmt.u-toyama.ac.jp

人文学部の近況

富山大学人文学部長
大工原　ちなみ

今年の四月から学部長に就任いたしました。同窓会の皆様には、常日頃大変お世話になっております。とりわけ会長の松平様には入学式や卒業式などの節目だけでなく、折にふれて人文学部に足をお運びいただき、ご助言を賜り感謝いたしております。このたび会長をご退任されるとのことですが、長い間本当にありがとうございました。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

人文学部の近況をご報告したいと思います。この二年間に四名の先生が定年を迎えられました。平成二十三年度末に心理学の海老原直邦先生、ドイツ言語文化の山本孝一先生、北村純一先生が、また平成二十四年度末に人間学の岡村信孝先生がそれぞれご退職されました。先生方は長らく教養部や人文学部で教鞭をとられた方々です。また学生の指導のみならず学部運営にも参画され功績をあげられました。本当に長い間有難うございました。

国立大学では近年、定員削減が進められていて、後任補充が滞るケースが多かったのですが、この間に五名の新任教員をお迎えすることができました。まず、平成二十四年四月に、哲学・人間学コースの哲学分野に池田真治先生をお迎えいたしました。先生はライプニッツを中心に、近世ヨーロッパの論理学と数学の哲学を研究されています。また同年十月には、お二人をお迎えしました。心理学コースにご着任の坪見博之先生は、実験心理学の手法を用いた認知心理学がご専門です。アメリカ言語文化コースにご着任の藤川勝也先生は、英語学がご専門で、主に意味論・機能論的観点から様々な言語現象を研究されています。

今年の四月には哲学・人間学コースの人間学分野に澤田哲生先生をお迎えいたしました。澤田先生は、メルロ＝ポンティの現象学を主に研究されています。また、十月には西洋史分野に、入江幸二先生をお迎えいたしました。先生はスウェーデン史がご専門です。

三十代半ばの四名を含む新進気鋭の五名の先生方をお迎えし、今後人文学部がさらに充実していくものと信じております。

さて昨今、学部教育では、グローバル人材育成が叫ばれています。人文学部は、専門教育の中で中国語、朝鮮語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語を、ネイティヴスピーカーの先生方のご指導も仰ぎながら少人数教育でしっかり学んでいます。その成果を現地で発揮できるように、ノヴォシビルスク大学と慶北大学校人文大学と部局間交流協定を結んでいましたが、今年の三月にモスクワ言語大学と締結し、台湾の政治大学とも交渉中です。全学のものも含め協定校とは学生の交流が盛んです。留学希望者も多く、オルレアン（仏語）やマーレイ州立大学（英語）等の短期語学研修も人気です。最近ではアメリカの大学へ留学した後、台湾や中国の大学へ中国語を学びに行ったり、韓国内の二つの大学にいく等アクティヴな留学生もいて頼もしい限りです。海外への派遣留学生や受け入れた留学生を支援するために、少額ではありますが人文学部独自の奨学金制度を設けて応援しています。

すでにご存じのことと思いますが、人文学部の教員が開講している公開講座のほかに、授業を一般の方に開放する「オープン・クラス」という制度があります。人文学部では、全学の中でも多くの授業を開放しています。受講生には昼間時間の取りやすい年配の方や主婦の方が多いのですが、時折卒業生の方がいらしてくださることがあります。学生時代に帰って学生たちと机を並べて勉強なさってみてはいかがでしょうか。

今年は文部科学省を主体に「ミッションの再定義」が行われています。各大学や学部が作成したそれぞれの強みや特徴を記した資料に基づいて、文部科学省が「ミッション」を策定するというものです。人文社会系に対しては厳しいものになるとの大方の見方もあり、人文学部にどのようなミッションが示されるのか気になるところです。

いかなるミッションが下されるか未知数ですが、旧制富山高校以来の伝統を守りながら、大学を取り巻く厳しい環境に対処すべく試行錯誤を重ねながら努力していく所存です。同窓会の皆様には、ご助言やご協力を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

卒業後五十年、文芸翻訳三十年

亀井　よし子（12回英文）

人文学部の前身である文理学部文学科（英文学専攻）を卒業してから、驚いたことに、来年で五十年です。私が卒業した一九六四年といえば、秋には世界初の高速鉄道・東海道新幹線開業、直後に東京オリンピック開催と、日本がようやく戦後の混乱から抜け出し、高度経済成長が始まりつつあったころでした。

それもあって、それまで四年制大学卒業の女子にはほとんど門戸を開いていなかった民間企業でも、一部でごく「試験的に」四大卒女子を採用するようになっていました。おかげで、私も縁あって東京の総合商社に就職することになりました。

入社式が終わって配属されたのは「非鉄金属部地金課」という見るからに固い漢字の並ぶ課の貴金属部門。銀やプラチナなどの地金を輸入・販売する部署でした。私のおもな仕事は、担当の男性社員のアシスタントとして輸入・販売に必要な書類を作ることでしたが、しばらくすると海外の業界紙に掲載される貴金属相場情報や、相場を左右する政治・経済ニュースをピックアップして翻訳し国内の顧客に提供するという仕事が加わりました。それまで相場だの経済だのの情報とはほとんど無縁に過ごしてきましたから、見慣れない用語や言い回しの扱いに四苦八苦（当時はまだ関連分野の辞書のたぐいは充実していませんでした）。いま思えば、ひどくつたない訳で、とても翻訳とはいえない代物だったに違いありません。それでも、思いがけず割り当てられたこの仕事が、大げさにいえば、その後の私の人生を方向づけることになりました。退職後も引き続き翻訳の仕事を任されて、いうところの「実務翻訳者」としての出発点になったのですから。

その後、結婚・出産をはさんで細々と続けていた仕事の範囲が時間とともに少しずつ広がって十五年ほどたったころ、ふいに、どうせこの仕事をするなら好きな分野の翻訳がしたいという思いが芽生えました。学生時代のある夏、現代作家の作品を原書で読んでレポートすべし、という課題が出されたことがあるのですが、そのときにちょっぴり翻訳のまねごとをしたことがあって、それがとても楽しかったのを思い出したのです（もちろん、学生のころは、翻訳など大学の偉い先生のなさるもの、自分にそんな大それたことができるはずはないと思いこんでいましたが）。

亀井よし子氏　最新刊

（レイチェル・ジョイス著　講談社）

そのころ、情報収集の意味もあり、アメリカのニュース雑誌NEWSWEEKを購読していましたが、とくに書評欄には入念に目を通し、面白そうな作品を取り寄せては読んでいました。そんななかの一冊、ボビー・アン・メイソンという女性作家の短編集に惚れこみ、ぽつぽつと訳しはじめてみました。ケンタッキー西部の小さな町を舞台に、そこに住むごく平凡な人々の平凡な日常の細部をすくい取るように描きだす作品群です。登場人物たちの会話が聞こえてくるような筆致に魅了され、ついで同じ作家の長編小説『イン・カントリー』を訳しはじめました。のちに「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」と名づけられることになる精神症状に苦しむヴェトナム帰還兵と、彼を見てあの戦争は何だったのかを知ろうとする十八歳の姪を巡る物語です。何かの当てがあったわけではありません。ただ翻訳という作業が楽しくてたまらなかっただけのことでした。そんなことをしながら、当時できはじめていた翻訳を教える学校に週に一度通い、文芸翻訳のなんたるかを学んだりしていたのですが、そうこうするうちに八〇年代のあのアメリカ文学の大ブームの到来です。ある出版社が『イン・カントリー』の翻訳権を取得したという情報を得て矢も楯もたまらず、思い切って原稿を持ちこんで運よく受け入れられました。文芸物の翻訳者としての第一歩が踏み出せたのです。そう書くと、ずいぶんスムーズな道のりだったように思われるかもしれませんが、もちろんいくつもの曲折はありました。それでも時代に恵まれて気づけばおよそ三十年、途切れることなく仕事を続けて百冊ほどの作品を世に出すことができたのは幸いでした。もう年齢が年齢ですからとても以前のようなペースでの仕事はできませんが、もうしばらく、気に入った作品を選んで続けていければと願っています。

（東京都在住）

亀井よし子氏主要訳書目録

『**イン・カントリー**』
ボビー・アン・メイソン著
（ブロンズ新社）

『**人類、月に立つ　上・下**』
アンドルー・チェイキン著
（日本放送出版協会）

『**ブリジット・ジョーンズの日記**』
ヘレン・フィールディング著
（ソニーマガジンズ）

『**ハロルド・フライの思いもよらない巡礼の旅**』
レイチェル・ジョイス著
（講談社）最新刊

この他、多数の訳書があります。

「女子力」

酒井智美（47回中文）

「女子力」ってなんだろう。よく耳にする言葉だが、なんとなく意味が分かっているようないないような。私の理解では、所謂「女の子らしい」という意味ではなく、何かもっとすごい女性特有の能力、パワーのことである。

私は、現在システムエンジニアとして働いているが、職場には男性顔負けの仕事をこなす女性が多い。

一般的な3Kが「キツイ」「汚い」「危険」と言われる一方で、IT業界では、新3Kとして「キツイ」「帰れない」「給料が安い」と言われている。最近では女性が意識された「規則が厳しい」「休暇が取れない」「化粧がのらない」「結婚できない」が加わり、システムエンジニアの仕事は7Kとも言われている。

たしかに、そう言われるくらいに実際の現場が厳しいことは事実である。そして、そんな過酷な現場で働く女性が、驚くほど元気でパワフルであり、生きいきとしていることも事実である。

設計やプログラミングでは、細かいチェック作業やレビューが不可欠であり、細かいことに気づく女性が自ずと力を発揮する。また、納期に追われ殺伐としたプロジェクト内で、メンバー間の雰囲気を良くしたり、お客様との交渉をスムーズに進めたりするのも女性である。もはや女性は会社にとって不可欠な存在となっている。

大学時代は、中国語言語文化コースに所属していたが、思えば我が中文も女子の力がすごかった。正確には、同級生に男子は一名しかおらず、数で圧倒していたといえばそれまでだが。

皆、中国に関することが大好きで、中国語会話、中国文学、中国映画、中国古代文字の授業は大変楽しかったし、留学生の友人、先生方からも様々な面で良い刺激を受けた。日常生活でも「中国」というキーワードに必要以上に敏感に反応していた。雰囲気的には、「キャー！中国！（LOVE！）」という感じ。はまりやすい女子の特性を地でいっていた。

そんな私にとって、仕事で中国オフショア案件に携われたことは本当に幸せだった。上海に行き、現地社員と日本側の架け橋的役割を果たす任務である。いつも以上に仕事に対するモチベーションがあがり、プロジェクトも大成功に終わった。

「女子力」は無限の可能性をひめている。これからも女子力を向上させながら日々生活していきたいと思う。（越前市在住）

（酒井智美　他著　中央経済社刊）

研究室から

哲学・人間学コース

准教授　田畑真美

卒業生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。哲学・人間学コースは平成十七年の学科・コース再編に伴い、従来の哲学コース、人間学コースが統合して発足しました。哲学と人間学の二つの教育研究分野を持ち、現在合わせて学部生約四十名、大学院生一名が在籍しています。かつての皆さんのように学問への情熱を胸に抱き、日々研鑽を積んでおります。

本コースは文理学部時代の哲学研究室に源を発し、時代の荒波の中で成長、変化を遂げてきました。簡単に辿れば人間基礎論コース時代を経て哲学コースと人間学コースとに分かれ、再び統合して現在に至るわけですが、こうした経緯や扱う文献、思想家が重なっているといった学問上の性質もあってか、分野間の垣根はほとんどありません。学生たちは人文学部棟六階の第一演習室（601）と七階の第二演習室（706）で勉強したり歓談したりして、仲良く過ごしています。なお601の「青空ノート」は健在で、後輩たちに受け継がれているようです。

スタッフの方は、ここ二年で新進気鋭のお二人の先生をお迎えする事ができました。哲学分野は旧哲学コース時代に中本昌年先生が退職された後、木下喬先生、永井龍男先生の二名で運営していましたが、木下先生が退職され、その後を受けて昨年四月、池田真治先生が着任されました。ご専門はライプニッツを中心とした近世ヨーロッパの倫理学と数学の哲学です。また人間学分野は、コース再編の際にお迎えした旧文化構造論コースの岩井瑞枝先生を加え、岡村信孝先生、松﨑一平先生、田畑の計四名で発足しましたが、ほどなく岩井先生が逝去されました。今年三月には岡村先生が定年退職され、同年四月、その後を受けて澤田哲生先生が着任されました。ご専門はメルロ＝ポンティの現象学です。以上、哲学分野二名、人間学分野三名の計五名で協力、連携しながらコースを運営しております。

哲学や人間学を学ぶことは確かに、目に見える形で世の中の役に立つことはないかもしれません。しかし、目に見える見えないにとらわれず真理を探究する楽しさを知ったことは、皆さんの強みになるはずです。自分を見失わず、自信を持って生きていってほしいと心から願っています。

過ぎ越し方を顧みて

蔵本栄一（3回英文）

私は昭和三十三年富大英文学科を卒業、市内の中学で三年それ以来県の高校で三十三年、富山国立工業高専で三年、私立高校で三年、通算四十二年間英語教員を務めてきました。

富大英文科には、吉川義夫、守屋獅郎、清水輝次、小森典、須沼吉太郎、佐伯彰一、吉田三雄の諸先生方がおられ、吉川先生は自書の「英文法詳説」をテキストとして英文法を、守屋先生は中世英語、ジョイスの「ダブリン市民」、小森先生は「マクベス」、清水先生は英文学史、須沼先生とMr.アダムスは英会話を担当されました。榎本先生は十八世紀の文学、フィールディング、リチャードソン等の作品論を教えられました。ちなみに私はジェーン・オースチンの「高慢と偏見」を卒論に選びました。佐伯先生はフルブライト交換留学生としてウィスコンシン州立大学から帰国されブルーストの「失われし時を求めて」、グレアム・グリーンの「権力と栄光」「事件の核心」などを学びました。吉川先生はチャールズ・ディケンズの"Old curiosity shop"を用いられました。面白いことに、ディケンズの頭文字、CDを逆にするとDC即ちDevid Copperfieldとなり、この作品は作者の自伝を作品にしたものと言えます。

私は卒業後、ノーム・チョムスキーの変形統語論に興味をもち彼の拡大標準理論を基に小論文を書き、国立富山高専に提出して、同校に非常勤講師として三年間勤務しました。

ヘンリージェームズの作品に主人公がスイスのアルプスの山上で遠方に光り輝き大空から何かが下がってくる描写があります。ヨハネ福音書第一章五十一節に「天が開け神の御使いが人の子の上を上り下りするのを見る」に類似点が見い出され、横光利一の未完の大作「旅愁」の後半に主人公がアルプスの山上から雲の彼方に鳥居の幻を望み見る箇所がありますが東西の文化の質的相違を論じたのは横光利一と遠藤周作であり、モーリャックと遠藤周作は文学の中にカトリック的主題を導入しました。私は一九四七年、コネチカット州で、ドーリ夫妻の家にホームステイをしてお世話になり、感謝しています。マルコ福音書第六章四十八節の夜警の時刻についてAVの記述とその後の聖書の記述の時刻に関して若干のゆれがある旨を小論文にまとめて『英語青年』に投稿、一九九五年九月号に採用されました。

私はこれまで、民生委員を二期務めましたが今は全てから解放され、孫は慶大理工学部電気工学科に在学し家では下の孫二人、息子夫婦と五人で暮しています。

（富山市在住）

研究室から　歴史文化コース

日本史分野
教授　鈴木景二

卒業生のみなさま、お元気でご活躍のことと存じます。ここ数年、大学内外の様子も変化しています。富山大橋が架け替えられ、学内各校舎の耐震工事も終わり、今度は食堂の増築工事が始まりました。人文学部ではコース制が再編され、歴史系は日本史・東洋史・西洋史に考古学が加わって四分野からなる「歴史文化コース」として一体化しました。これによりコース定員も歴史文化コース全体枠になり、日本史のみの定員がなくなったため、学年によっては一四人も在籍する場合すらあります。

日本史の教員にも変化がありました。二〇〇八年三月に富田正弘先生が定年退職され、名誉教授になられました。その後、日本史教員一人という困難な状況になりましたが、学内外の先生方に助けていただいて何とか凌ぎ、二〇〇九年四月に中世史の熊谷隆之准教授を迎えることができました。日本史のホームページも開設されました。演習室の雰囲気も変わりました。スチール棚を書架に入れ替えたことにより少し広くなり、『大日本史料』などの基本史料集がずらりと並んでいます。また研究室所蔵の「岩城家文書」「吉田家文書」の目録も出来て、研究に利用できるようになりました。研究室の行事は、ほぼ年一回の研修旅行を実施するほか、春秋二回のスポーツ交流大会への参加が続いています。

学生数は多めで推移していますが、富山を中心として北陸の学生の占める割合がかなり高くなりました。ちなみに院生は数年間いない状態です。卒業論文の対象として選ばれる時代は、中世後期から江戸時代の人気が高いようです。こうした傾向は、全国的な趨勢を反映しています。この先、どう推移していくのか分かりませんが、本当に日本史が好きな学生は大歓迎、という方針で教室運営を続けて行く心算です。

不良学生留学記
～酒と泪と音楽と～
中島　蕗子（52回ロシア）

二〇〇二年九月十四日、ソ連製プロペラ機ヤーク40が轟音を立てて、富山空港からウラジオストックへ（現在は廃止）黒煙を吐いて飛び去った。ノボシビルスク大学交換留学生第一号の私を乗せて。その日の夜に彼の地へ到着したが、翌日は奇しくも祖父の命日。朝に初雪が降り、寮の寒い部屋で小刻みに震えながら窓辺で手を合わせ、学業の成功を心に誓った。

しかし、その誓いはもろくもすぐに崩れ去った。ロシアの名門と名高いオペラ・バレエ劇場でのバレエ鑑賞がそのきっかけ。演目は覚えていないが、迫力ある群舞、オーケストラの音色の美しさ、すべてが圧巻だった。大学受験の前に腱鞘炎を起こしたことで音楽への道が絶たれたことを思い出し、劇場で涙があふれた。ロシア言語文学コースへの進学は、夢破れてもせめて大好きなロシア音楽に関われればと選んだ道だった。落ち込んでいた私に、ピアノレッスンに通うよう友人たちが勧めてくれた。人文学部の学生としては間違いなく落第だが、このおかげで私の留学生活は格段に面白くなった。

運のいいことに、仲良くなった日本語学科生のアーニャは現役の音楽教師。彼女が手伝ってくれたことで事はトントン拍子に進んだ。まず、物々交換情報誌なる物を活用し、ピアノを購入するために知らないロシア人のお宅を何軒か訪問してピアノを弾かせてもらったり世間話をしたりした。そして彼女に先生を紹介してもらい、なんと音楽学校の生徒になって月百ルーブル（当時で四百円）で勉強する機会を得た。その学校への入学希望書が傑作。「私ことフキコ・ハヤカワはノボシビルスク大学の留学生だが、修学期間内に貴校でのピアノ科目受講を希望する。なお、私は十九歳である」との内容。（注：音楽学校への入学は十九歳までが限度）富大生がロシアの公文書にて年齢詐称するわ、そのうえ専門外のダブルスクールなども…。なんたる不良。

ピアノを専門的に習うのは久しぶりだった。ベテランのナターリヤ先生に師事し、長年ついた癖のある演奏法を徹底的に直された。きれいに弾けるようになったころには、腱鞘炎の痛みがほとんど無くなっていた。ロシア語も上達し、いつしか先生の詩的な言葉の理解できるようになっていた。「このバッハの作品はね…指で『縫う』ように弾くの。あなたは音で刺繍し、タペストリーを作りなさい」。なんとも美しいロシア語。それをレッスンで聞けただけでも幸せな時間だった。

レッスンの他にも、音楽との関わりは現地の暮らしにうるおいをもたらしてくれた。ある冬の日、音楽学校への通学途中、低く上って橙色に輝く太陽の朝焼けの美しさに息をのみ、励まされたことも。学生寮ではモンゴル人研究生の女性と住んでいたが、「娘をおいてお国のために研究に来た。母としては本当にいい選択だったのかわからない」と言い、彼女は涙を流した。私が歌うから、弾いてほしいと乞われモンゴルの子守唄のメロディーを弾いた。甘いグルジアのワインが苦い涙の味に変わった。ピアノが縁で仲良くなった近所のウズベク人の娘さんたちとは、家を行き来する仲になり、今もネット上で交流している。

こんな調子でピアノに熱中していたので、肝心要である期末の言語学の口述試験は最悪だった。徹夜で勉強して当日は全く頭が働かなかった。ロシア人学生たちと机を同じくし九時に開始した口述試験は、特別にハンデをつけてもらい簡単な問題を選ばせてもらったにも拘らず、回答メモを作るのに猛烈に時間を要した。言葉に詰まりながら二十分もかかって回答し、午後三時にビリで終了した。及第点はついたが、今でも夢に見る苦い試験の思い出である。この場を借りて私を推薦してくださった当時の指導教官、武田先生に平にお詫びしたい。

帰国後は、何とか卒業し、富山県内の会社にロシア語要員として採用された。数回の転職を経て運よく在外公館派遣員に合格したのが二〇〇九年。在モスクワ日本大使館勤務期間に新聞社の特派員だった夫（本学哲学コース30回生）と出会いその二年後に結婚した。今年の二月には娘を出産し、母の武勇伝？をいつ聞かせようかと、専ら楽しみにして子育てをしている。

（金沢市在住）

二足の草鞋
紲野八史井（かせのやしい）
（専攻科1回東洋史）

「私に出来て、貴女に出来ないはずがありません――」

富山大学文理学部文学専攻科第一回生に合格して数日後、一九七三年四月第一日曜でした。「東洋史」主任教授の間野潜龍先生ご自宅で、奥様が物干しされて、麗（うらら）かな午後でした。

その約二週間前。全国二百名参加「第一回ヨーロッパ学生旅行」二十一日目に羽田出迎えの姉から、県立高校社会科教諭新採皆無の新聞を渡され「東大入試が一月程前突然中止の一九六九年春も幸運だったのに」と狐につままれて金沢に帰宅しました。翌日、金沢大法文学部で卒業証書を受取り、本科修了した料理学校で密閉個包装バターやジャムが珍しがられ、友人知人に土産話等。しかし以後は、行くべき処が無く、初めて浪人の悲哀を味わう日々でした。

四月早々母が新聞に富山大学専攻科一回生募集を発見。南富山に、曾祖父が明治期創業した飛越運送合資会社の石碑が在り、祖父は旅籠町に戦時中「日の丸タクシー会社」を経営し、母は旧制富山市立女学校卒業生です。

試験は語学と専門の筆記に面接。朗報に安堵の当日「非常勤講師」依頼があり、出入りの新聞記者は「教職採用は現場実績が重要」とのこと。ご相談した先生から、ご自宅に呼ばれ「私は京大に学びながら高校で教え十年間二足の草鞋を履きました。困った時に考えればいい」篤実（とくじつ）な笑顔に従い私も履きました。

委員会に返答まもなく宇出津高校に赴き、世界史に日本史授業合計週八時間で、当初依頼の倍と判明。間野先生は他の先生方と特別時間割を組まれました。研究室で相対して受講中、白銀の立山連峰が何とも雄大でした。

あの一年間、週半分は徹夜で無遅刻無欠勤。最初と最後の授業で拍手してくれた就職組から明治大と日野大受験二名が進学。

その間「明代特務政治」の卒論が滞り、石尾さんから「手元に出来ている分を出せばいい」という先生の伝言を頂き、甘受。お蔭様で専攻科一年で修了。新採も叶い、金大では欠席した卒業式修了式・謝恩会に感慨無量。

今は昇龍となられた間野先生に万感をこめ御礼申し上げます。

（金沢市在住）

写真は、富山テレビで放映された、母の祖父・野口宇太郎についての石碑です

卒業祝賀会

平成二十五年三月二十二日、名鉄トヤマホテルで、卒業祝賀会が開かれました。人文学部学位授与式に引き続き、同窓会主催で行われるもので、沢山の正装した卒業生達や、先生方、同窓生で会場は大賑わいでした。

吉田学部長の乾杯ご発声で会場は大いに盛り上がり、恩師、友人との歓談に時間を忘れ、写真を撮りあい、杯を傾け、共に卒業の門出を祝いました。名残は尽きませんでしたが、最後に松平同窓会会長の万歳三唱で終宴となりました。

第一回 人文の集い

第一回人文の集いが平成二十四年十月十三日㈯に開催され二十五名が参加しました。会場は旧制富山高等学校の講堂を移築改装した「ホテル古志」で、旧制富山高校同窓生の参加もありました。会場には「富山大学展・百四十年に及ぶ歴史を訪ねて」の展示も提示され、十時半より人文学部教授立川健治先生の講演「富山大学の歴史をたずねて」をお聞きし、その後懇親会を開きました。懇親会では旧制富山高校と富山大学が蓮町で併存していた時期のエピソードや、寮歌も披露されました。

平成二十四年度 同窓会総会

日時▽平成二十四年十一月十日
会場▽ボルファートとやま

総会では、平成二十三年度業務報告、決算報告が承認され、引き続き「富山大学人文学部同窓会プライバシーポリシー」が提案され、原案通り承認されました。これは、当同窓会が大学及び同窓生から提供を受けた個人情報の管理について定めたものです。

続いて同窓会の進展・活性化について協議し、第一回人文の集いの報告と評価があり、平成二十五年度に第二回人文の集いを行うこととしました。

更にかねて懸案であった同窓会名簿の発行について検討し、当会の目的を達成するためには欠かせない事業としては今後も発行すると決定いたしました。名簿発行業務は株式会社サラトに委託することが提案され、承認されました。

最後に、米原寛理事（14回史学）、谷口恵子理事（24回院哲学人間学）、白井裕貴理事（60回国際文化）、成瀬健輔理事（60回日本文学）の四名を新理事として承認しました。

総会後、人文学部　小助川貞次教授による記念講演「漢文訓読のルーツを辿る訪書旅行」をお聞きしました。

その後行われた懇親会には、吉田俊則学部長、小助川教授も参加され、世代を超えて交流と親睦を深めました。

平成二十五年度 第一回理事会

日時▽平成二十五年六月十九日
会場▽人文学部多目的室

平成二十四年度業務報告と決算報告を承認しました。

引き続き総会記念講演講師について協議しました。更に第二回人文の集いについて検討しました。総会、人文の集いについては本誌八頁をご覧ください。

また、新理事として島隆司氏（22回史学）田中俊樹氏（61英米）山本将司氏（61国際関係）を総会に提案することが了承されました。

◎専攻、同期様々なつながりで同窓生の集まりを計画、開催されたときは、同窓会事務局にご一報ください。また会員の皆様が本を出版された際も是非お知らせください。年一回の会報ですが、同窓生相互の交流の一助となるよう務めてまいります。

なお、当会の会則、プライバシーポリシー、役員一覧、本誌「人文」バックナンバー等は当会ホームページでご覧になることができます。

新刊案内

人文学部縁の方々の新刊を紹介します。

役に立つ地理学
伊藤修一、有馬貴之、駒木伸比古、林琢也、鈴木晃志郎（社会文化准教授）編　古今書院　2012年４月刊

翻訳の品格“新訳”にだまされるな
藤井一行（名誉教授）／著　著者自家出版会　2012年５月刊

地方競馬の戦後史：始まりは闇・富山を中心に
（競馬の社会史；別巻１）　立川健治（国際文化論教授）／著　世織書房　2012年９月刊

李光洙長篇小説研究：植民地における民族の再生と文学
和田とも美（東アジア言語文化准教授）／著　御茶の水書房　2012年９月刊

メルロ＝ポンティと病理の現象学
澤田哲生（哲学・人間学准教授）／著　人文書院　2012年９月刊

暮らしの中のロシア・イコン
中澤敦夫（ヨーロッパ言語文化教授）、宮崎衣澄／著　東洋書店　2012年10月刊（ユーラシア・ブックレット　no. 176）

要説教員養成・採用と免許法　教職志望者の必勝指南
岩井彌一、廣瀬裕一（哲学24回卒）／著　協同出版　2012年11月刊

カジュアル・ベイカンシー　突然の空席　１・２
Ｊ.Ｋ.ローリング／著　亀井よし子（英文学12回卒）／訳　講談社　2012年12月刊

烈しく攻むる者はこれを奪う
フラナリー・オコナー／著　佐伯彰一（旧教官）／訳　文遊社　2013年１月刊

平成25年度人文学部　総会へのお誘い

拝啓　今年の夏は猛暑の連続でいまだ残暑の日々ではありますが、皆様にはお変わりなく、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて本年度の総会を、下記の要領で開催いたしますので、多数の皆様のご参加をいただきたく、ご案内申し上げます。

敬白

人文学部同窓会長　松平　義磨

日時　平成25年11月９日(土)　午後１時30分

場所　ボルファートとやま

（富山市奥田新町81　TEL 076－431－1113）

講演　講師　平田　純　富山大学名誉教授

演題　英訳の日本文学管見

講 演 要 旨

漱石の「心」の英訳本を手にした時、訳者がわざわざ「タイトルについて」として、「この小説の題名になっている「こころ」は、複雑でまた重要な語であるが、人間的感情の欠如した、純粋な知性の働きとは区別された、「物を思い、感ずるハート」と説明するのが最も相応しいであろう。「こころ」は感ずると同時に考えるのだから、「ハート」では時として不十分な訳語となるだろう。しかし、「こころ」がこの小説全体を通して流れているモチーフであるから、私は心を表すのに、そして、この翻訳では、可能なところで、終始一貫して使うのに、「ハート」という一語を選び出した。しかし題名としては、原語 kokoro を留めるのが最善と思われた。」という苦心の程を陳べていたので、英訳された具体的な作品ではどうなっているのか、それを検証してみたいという関心を持ったのでした。

だから今のところ、地図は大まかな略図でしかないし、それが宝の山になるか、襤褸屑でしかないか、見当も付きません。というわけで、現時点では話題を「英訳の日本文学管見」あたりで、内容未定としていただければ幸いです。

懇親会：午後４時　会　費：5,000円（当日受付でお納め下さい）

お知らせ

第二回「人文の集い」

昨年発足した「人文の集い」を今年は大学のキャンパスの中で行なうことを計画しました。

期日：10月5日(土)　10時より

場所：富山大学人文学部
第2講義室

講演「日本の狂言と
ウィーン民衆演劇」

富山大学人文学部
外国語教育専任教員
ドイツ語（教授）
ヴォルフガング・ツォウベク

（概要）狂言は室町時代に、ウィーン民衆演劇はバロック時代に生まれたが、ユーモアに関してさまざまな共通点があります。両者の上下関係や、夫婦関係に関しても、例えば頭がいい召使いと間抜けの主人や、強い女と恐妻家の旦那というあべこべ世界のような人間関係も描かれています。それで笑劇のテーマは世界中、つまり日本でもヨーロッパでも似ているといえます。

終了後、十一時五十分よりキャンパス内の「アザミ」にて懇親会を予定しています。講演は参加費無料、懇親会は会費二千円で一方だけの参加もできます。

多くの方のご参加をお待ちします。同封の参加申込票に記入してお送り下さい。

第六回富山大学ホームカミングデー

今年のホームカミングデーは杉谷キャンパス医学部・附属病院でおこなわれます。

日時：10月26日(土)
12時30分～17時

受付：医学部看護学科一階玄関

記念講演会
「前立腺癌診療の最近の動向」
富山大学医学薬学研究部
布施　秀樹　教授
（腎泌尿器科学）

施設見学会・懇談会

尚、同時に大学祭が開催されています。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

報告

同窓会連合会総会

平成二十五年度富山大学同窓会連合会総会が、去る七月十八日(木)に富山電気ビルで開催されました。

二四年度事業報告、決算報告、二五年度事業計画、会計予算が審議承認されました。引き続き役員の交代について議事が行われ、北日本新聞社会長で人文学部同窓会員である河合隆氏（21回国文学）が新しく会長に就任されました。併せて北野芳則前会長は顧問に推挙されました。さらに、第6回ホームカミングデーの開催について前記の通り決定しました。

総会終了後、同じく同窓会員の前立山博物館長、米原寛氏（14回史学）による記念講演「立山曼荼羅に見る日本人の自然観」をお聞きしました。

その後の懇親会では、学部を超えて幅広い世代の交流が花開きました。

人文学部教官異動

退官（平成25年3月）
○岡村　信孝（人間学）

着任（平成25年4月）
○坪見　博之（心理学）准教授
○藤川　勝也（英米文化）准教授
○澤田　哲生（哲学）准教授

年会費の報告

本年度の年会費納入状況をお知らせします。平成24年６月１日～25年５月31日迄、310名（終身会費13名、年会費297名）の方々から427,000円の年会費を納入していただきました。ご支援、ご協力を厚く御礼申し上げます。

●編集委員●

佐野　和美　田中　史子
谷口　恵子　成瀬裕美子
山藤　登　畠山　節子